

James Griffin, *Well-Being*, ch.6-7

地の文は、本文の要約。小さいゴシックで書いている部分は発表者による追加情報やコメント。

ch.6 1人の場合

本章では1人の個人内部の福祉 well-being の測定の問題が取り上げられ、序数的／基数的測定の両方について検討がなされる。福祉は量的な比較・測定が可能なものであり、価値の通約不可能性の問題は実際にはさしたる問題とはならない。ただし、量的な測定が可能なことは単一の尺度 scale としての超価値 super-value の存在を意味するわけではない。

6-1 福祉はそもそも計測できる種類のものなのか？

【問い】福祉 well-being は、どれだけ弱い形であれ、何らかの尺度 scale によって測定可能なのか？

なんでも測ることのできるひとつの基準があるというのは誤り。

[S.S. Stevens 1946]による尺度水準の分類。

- ・ 順序尺度 **ordinal scale** : ある基準によって順序付けを行うもの。それぞれに割り振られた数字は大きい小さいか、または等しいかを表す。足したり引いたり計算できるものではない。モース硬度など。
- ・ 間隔尺度 **interval scale** : 等しい間隔に応じた数字を割り振る。華氏・摂氏の温度など。加減の演算にも意味があるが、直接の乗除は無意味。原点は任意。 $y=ax+b$
- ・ 比率尺度 **ratio scales** : 割り当てられた数字は間隔尺度の性質を満たし、比率や乗除にも意味がある。原点は絶対的。絶対零度の発見以後は、温度も比例尺度に（「20° は 10° の2倍熱い」ということが可能）。

順序尺度は序数的であり、間隔尺度・比率尺度は基数的である。

他にもいろいろな尺度を考えることができる。

冒頭の【問い】はいくつかの理論的な問題を引き起こす。

- ・ 福祉についてのいかなる量的な言明に意味があるのか？
- ・ より多い／少ないといった順序付けや、福祉の「最大化」に意味はあるのか？
- ・ 「こちらの諸価値の間隔 **gap** のほうが、あちらのものよりも大きい」（間隔尺度）とか、さらに「これはあれよりも3倍の価値がある」（比例尺度）といった基数的な言い方も有意味であるのか？

理論的な問いと実践的な問いはそれぞれ重要だが、現実にはそうすっきりとするものではなく、理論的な問題に答えられればひとまずはよい。

福祉を実際に計測するのが難しいといったことは実践的な問題であって、理論的な問題ではない。だから、現実に行えないということをもって測定が不可能とするのは早計であるということになる。

1人の場合のほうが多数の人々の場合よりも福祉の測定が容易というわけではない。2つの人生の選択を考えよ。個人内の異時点間比較はむしろ、異個人間比較に近い問題となる。本章では最も単純なケースとして、安定した選好をもった1人の個人について考える。

6-2 福祉の順序尺度

計測可能性 **measurability** を証明するには、経験的なことがらの関係と演算の系が、ある数的な演算と関係の系と同形のものであることを示せばよい。次の2つの定理の証明が必要。

- ・ 表現定理 **representation theorem** : 同形であるとは、数の計算のある **aspects** が、世界のある **aspects** を表現 **represent** するという事。
- ・ 唯一性定理 **uniqueness theorem** : 測定の尺度は、特定の種類の唯一性をもつということ。要するに、順序、間隔、比率…、などのどれかを決定できるということ。

経済学の一般的想定：1人の個人の福祉は序数的に（順序によって）**ordinally** 測定可能である。

→ これは【基数的に測定可能とするよりは】控えめな主張であるが、通約不可能性 **incommensurability** はそれでも問題を引き起こす。

しかし、あるものは我々をより豊か **better off** にするとか、同じぐらいにするという比較の言明が可能であるという意味で、福祉は量的なものであり、序数的に（順序付けて）測定可能なものである。

「少なくとも同じぐらい（か、それ以上に）豊か（**at least as well off**）」という関係を「 $\geq w$ 」と表す。「 $\geq w$ 」が、たとえば「弱い順序付け **weak ordering**」の要素をもっているとすれば、福祉は序数的に計測可能であることを示すことができる。次のようなもの。

- 1) 反射性 **reflexivity** $(\forall x) xRx$
 - 2) 推移性 **transitivity** $(\forall x)(\forall y)(\forall z)(xRy \ \& \ yRz \ \rightarrow \ xRz)$
 - 3) 完全性 **completeness** $(\forall x)(\forall y)(xRy \ \vee \ yRx \ \vee \ x=y)$
- xRy は「 x は少なくとも y と同じぐらいよい」という関係を表す。

福祉についていえば、「おおまかには等しい」といった曖昧さを含んだ表現を用いることが適切な場合があるが、そうすると「 $\geq w$ 」は厳密には完全性や推移性を満たさなくなることがある。しかし、たとえば「おおまかには等しい」AとBについて、A++とB-を順序付けることはできる。それだけでも進歩である。そういったふうに、「部分的に推移的で弱い順序付け」が「 $\geq w$ 」について可能である。曖昧であることは、自己利益にすることがらの熟慮にあたってはそれほど破壊的な結論を導くわけではない。福祉は序数的に計測可能な量的なものなのである。

なお、本節の議論が含意することは、福祉の計測可能性をめぐる問題においては、すべての価値の共通尺度となる単一の実質的な超価値 **super-value** が存在するかどうかは問題にはなっていないということである。一元論と多元論の対立はここでは関係ない。測定にあたって超価値は必要なく（幸いにも、それはない）、量的な性質があればよい。そして、福祉と、自己利益に関する価値 **prudential value** は、それ自体が量的な性質のものなのである。

prudential value に関しては前章の議論も参照。本レジュメでは以下、煩雑になるのでそのまま原語で書くこととする。

6.3 基数の領分

福祉はどれぐらい強い意味で測定可能であるといえるのか。福祉は「ときには」基数的尺度で計測可能である。ここにおける量とは、知悉的欲求 **informed desire** の強さである。**strength** と **informed** の意味については、**ch.1, sec.4** を参照↓。

【効用は対象の真の性質を認識している場合に人々が持つであろうという理念的な欲求(知悉的欲求)の充足であり、欲求が「強」ければ強い。この「強さ」は動機の強さではなく、欲求対象の性質(階層構造)を認識した上での冷静な選好順位のランク付けである】

福祉の測定にあたっては、基数の領分 **pockets** も存在する。

県参事会 **county council** が、私が使っている道路のレイアウトを変えることを決めたとする。それは私が美しいと思っている色々なものを脅かす。私は栗の木を守るためのキャンペーンに5時間、石の壁のために10時間、雑木林を守るために20時間、余暇を犠牲にすることを決める（限界価値 **marginal value** は問題にならないものとする）。こういった数値は、欲求 **desire** と行動 **action** の結びつきが経験的には十分にあるという理解のもとでは、脅かされているそれぞれのものにどれぐらい価値があると私がみなしているかを表す。私は雑木林には石の壁の2倍の価値があるものとし、石の壁には栗の木の2倍の価値があるものと考えているのであり、また、石の壁と栗の木の価値を結合したものは私にとっての雑木林の価値にまだ及ぶものではないと、我々は言うことができるのである。

このあたり、主語がIであつたりweであつたりするのは注意すべきところか。「私」が雑木林や石の壁といったものの価値をどれだけ基数的に評価しているかを、「我々」は見ることができる。

これは基数的尺度といえるものか。我々は福祉のユニットを余暇時間のユニットによって規定することができる。そうすると、評価するモノの間隔 **gap** の大きさについて語るができるのだから、少なくともある「間隔尺度 **interval value**」を手にしてことになる。比例尺度のほうは用いる原点 **zero-point** の性質如何に依存している——「ゼロ」の福祉とは？ いずれにせよ、この双方の尺度は基数的であつて、加算が可能なものである。問題はそれがどちらかということではなく、尺度の射程である。それはごく限られたものであつて、せいぜいローカルな重要性しか持たない。しかし、少なくともときには、福祉を基

数的なものとして有意味に語ることはできるのである。

こういった基数の領分は、効用の確率主義的な考えには反して、確率とは独立に、福祉とその基数的測定を有意義なものとする。von Neuman – Morgenstein の公理における期待効用は間隔尺度による測定が可能な基数的なものである。しかし、効用の基数化はこれだけではないし、確率と結び付けることによって基数の領分を拡張することも否定はされない。が、実践における福祉の最大化戦略に使えるかどうかは疑問であるし¹、あまり重要とはみなさない。

6.4 いかなる測定の力が実際に必要なのか

- ここからは実践的な問題。必要なのは快樂の尺度ではなく、**prudential value** の尺度である。その尺度によって、異なる人生を比較することが可能になる。
- 1人の個人の場合には（選好が安定しているならば）序数的尺度だけで十分であると多くの経済学者は考えているが、そうではない。確かに理論的には選好の順位があれば最大値を見つけることができるのだが、実践的には、何らかの基数的な測定によらなければ、2つの多面的な*選択肢の間に選好の順位をつけることはできない。

* 公務員になれば安定しているが刺激に欠ける、企業家になるのはエキサイティングだがリスクも大きい、といった具合に、現実の選択肢には様々な面があるので、そう簡単に順位がつけられるものでもないといったことか。それでも我々は現実になんか決断をしているのだから、何らかの基数的な尺度がそこにはたらいっているといえりえるのかもしれない。

人生におけるよさ **goodness** が短期的な快樂や経験から構成されるものであるならば、ライフコースの判断には合算による方法、つまり付加尺度 **additive scale** が必要になる。しかし、そういった心的状態説は誤ったものであるから、それは中心的な問題ではない。福祉の測定にあたって必要なのは個人の現在の好みや選好ではなく、一般的に生をよくするものについての因果関係の知識である。グローバルな知悉的欲求の知識は自己利益 **prudential good** の一般理論と、人間の本性についての因果関係の理論から得ることができる。これは次章での個人間比較の性質を理解する上でも中心的なものとなる。

¹ どうしてなのかよくわからない。

ch.7 多数の人々の場合

異個人間比較の問題は、福祉の観念をいかに理解するかにかかっている。本節では、単一スケールの想定によって異個人間比較を個人内比較に還元する試みの限界が指摘される。グリフィン自身は、知悉的欲求 informed desire の充足として福祉 well-being を捉え、それに多様な価値を通約するスケールとしての役割を担わせる。その立場はいわゆる客観的リスト説に近付くが、各人において諸価値の重み付けが異なることを否定するものではない。その人と諸価値の関係 relevance を勘案することによって、個人間の差異を解消することなく、福祉の比較が可能になるとする。ここにおいては、個人内比較・異個人間比較・社会スケールでの比較はいずれも同じ推論構造のもとに捉えられる。その上で、政府のなすべき仕事について若干の示唆が行われている。

7-1 福祉の観念と比較可能性の問題のつながり

比較可能性と福祉の諸観念 conceptions のつながりが示すことは、次の3つを同時に、つなげて考えなければならないということである。すなわち：

- 1) 採るべき福祉の説明
- 2) 有用性：道徳的判断、および個人間比較にとっての
- 3) 道徳的熟慮に必要な測定の方法となること

福祉の知悉的欲求観念のもとでは、いかにして個人間比較を行うことになるのか？

7-2 比較可能性の自然な主張と、その問題

個人間比較の性質はいったいいかなるものか。他者の心を知ることができるという仮定のもとでも、これは難しい問題である。「2つの」経験に「1つの」尺度を得られるのか。

自然で一般的な応答は、選好によるものである。私が2人の状態を自分に示す represent することができるとしたら、両者をランク付けることができる。これは判定者自身の可能的な状態についての選好に訴えかけることによって、個人間比較を個人内比較に還元するものである。しかしこれはあくまで現在の私自身の価値観や好み、態度によるものでしかない。「学者としての私」と「登山家としての私」を比較する選好の形成が可能であろうか。

7-3 問題は解決できるのか？

・効用関数を拡張する試み

1) ハーサニー (John Harsanyi) の拡張された効用関数 extended utility function

人々の選好は同じ一般的な因果関係の変数によって形成されるとすると、選好の違いはその変数の違いであることになる。もし2人の個人が同じ生物学的遺伝形質を持ち、同じライフヒストリーを生きたならば、2人は同じ選好を形成する同じ一般的心理法則のもとにあり、結果的に同じ選好を持つに至る。こういった因果関係を十分に知ることができるとするならば、すべての判定者は同じ効用を割り当てることになる。

「拡張された効用」のもとで、全員が同じ効用関数を持つ。ここでは個人間比較が、1人の個人内比較に還元されるのである。

個人の効用関数は「自然の法則」といったものによって完全に決定されるとすれば、それを知悉することによって客観的な効用関数のあり方を知ることが理論的には可能である。

→ みんなの選好が同じ一般的な因果関係の変数によって決定されることなど、グリフィンとしてはだいたい賛成。しかし、拡張された効用関数は「私の」効用関数ではないし、選好を再導入 reintroduce する十分な動機を提供しえない。

2) 深い効用関数

我々はみんな、同じ「深い効用関数」を持っているとの仮定：我々の好みや態度の違いは単に、実際には同じ実質的目的への異なった経路を表しているにすぎない。個人の表面的な効用関数から離れるならば、究極的に信頼のできる authoritative、基本的なパースペクティブから全員が同じ選好を形成する。

→ しかし、単一の実質的な超価値を想定してしまっている：価値の多元性に反する

判定者の選好によって比較可能性を説明するのは難しい。これが唯一の選択肢だとすると、欲求説としては困ったことになる。しかし、そうではない。

7-4 福祉の異個人間比較

個人間比較は、すべての人々にあてはまる価値のセットの枠組みの中で可能。それは次の3つからなる。

1) 普遍的な prudential values のリスト

→ 通常の normal な人々の欲求。知悉した (when informed) 人々は、自律的に生きることを望み、深い人間的つながりを求め、人生において何かを達成することを欲し、楽しく過ごそうとする。これらは、どのような生においても価値あるものである。違いが現れるのは、ある人がある価値をどのように／どれぐらい実現することができるかということにすぎない。

2) 人間本性 human nature についての一般的な因果関係の知識

3) そういった因果関係上の一般性と、その人との関係 relevance についての知識

この3つによって、異なった欲求をもった人々の福祉（どれだけ豊かか how well off）を判断することが可能である。

上のハーサニーの議論にシンパシーを示しているように、人間本性に関する因果関係の変数が同じであれば人々は同じ欲求を持つに至ることが想定されているような感じがする。各人の欲求の差異は遺伝形質やそれまでのライフコースといった欲求形成の経路によってすべて自然的に記述できるということか。

例)

- ・ スミス：億万長者になることが人生のすべてだと思っている
- ・ ジョーンズ：自律的に、愛し愛されて生き、重要なことを達成し、彼自身の人生を楽しみたい

この2人の福祉をいかにして比べることができるか：2つの強い欲求をどうすれば1つの尺度で計測できるのか。「強さ」は強度 **intensity** や動機付けの力といった意味ではなく、知悉された選好の順位付けという意味のものである。ここで重要 **relevant** な欲求は、その対象の本質を少なくともいくらか評価した上で形成されるものでなければならない。

→ この一般的プロフィールは異個人間比較の全面的な根拠となるわけではない。そのような客観的リスト説では個人間の差異を説明できない。比較可能性の問題の解決は、自己利益に関わる価値の理論のコンテキストに置かれなければならない。それは価値がどの程度まで個人的なものでないかと、諸個人の差異がいかに諸価値に影響するかを明らかにし、また、個人的な正しさと非個人的な正しさのミックスを得るものである。

→ 福祉の捉え方 **conception** が、比較可能性の問題に影響を与える。基本的な **prudential values** は、多くの人々の生について、それがどれだけよいか、どのようにしてよくなりうるか、そして他の生き方との比較の基準を、おおざっぱではあるが提供する。比較可能性において最も深く決定的な問題は、福祉の性質についてのものなのである。知悉的欲求に着目することは、福祉の性質の特定の説明を受け入れることになる。そこでは **prudential value** の一般的プロフィールが比較にあたって用いられる。個人間比較は複雑な規範的エクササイズの一部であるという意味では、価値判断である。

7-5 個人内の通時的比較

- ・ 私自身の福祉について考える場合、私は「私の」どの時点の好みや欲求を考えることもなく、かわりに、**prudential values** のプロフィールを参照する。いかなる種類の生き方が価値のあるものであり、どれが私にとって可能なものであるのかを決定するのである。
- ・ 個人内比較と個人間比較はどちらが基礎的ということではなく、同様の推論に属するものである。

このプロフィールは欲求されるべきものがあらかじめリストアップされているのだから客観的リストのようなものであるが、その範囲内では各人による主観的選択の余地が残されているのであって、その限りで諸個人の差異が尊重されることになる。参照、安藤馨『統治と功利』(2007年、勁草書房)、126-127頁。

知悉的欲求の充足が福祉であるとするならば、まずは個人におけるそれがどれだけのものが計測され、個人間比較は各人のその充足度の比較になる、つまり個人の福祉が基礎的なのではないかとも思うのだが、どんなものか。

7-6 社会規模での比較可能性

- ・ 政府の役割について。そこでは個人間比較の場合と同様に、自己利益に関わる諸価値のリストを用いる。我々は各個人の欲求についてではなく、人生において一般的に望ましいものを知る必要がある。諸価値のリストと不可避の手段が、「客観的な」測定を提供する。
- ・ 政治哲学者の中には、政府は善き生のどんな目的にも使える手段 **all-purpose means** に関心を限定す

ることによって、善き生とは何かという実質的な構想の対立から中立的であるべきであると主張する者もいる。正義がそのような要求をするものかどうかは疑わしいし、厳しくすれば政府は何もできなくなってしまう——芸術の評価は万人の善き生の構想の一部ではない。健康は **all-purpose means** であるけれども、健康増進の道徳的要請が十分に満たされるというポイントはあるはずである。何が価値あるものであるか、それはどのようにしてか、そして人生の質の包括的な重要性についての何らかの尺度によって、競合する様々の主張をランク付けしなければならない。

- ・ 政府は福祉の基準を、辞書のように、多くのサイズで必要とする。ふつうはポケット版でよいが、ときには机上版が必要である、など。知悉的欲求の観念はこれを可能にするが、**all-purpose means** に拘束された中立的な基準では無理である。

・関係あるかないかよくわからないけれどものコメント。

「現実と仮想とは、比較できるときには対等でありえず、対等にしようとする比較そのものが成り立たなくなる。どちらにしても、対等に並べて比較などできない。このことは、現在の現実がただ一つしかありえないことに由来する」、入不二基義『時間と絶対と相対と』(勁草書房、2007年)iv頁。

個人内のライフコースの比較を考えてみる。この著者は山口でしばらく生活して、東京に戻ってきたといういきさつなのだが、「やはり東京で暮らすほうがいいですか」との質問に困惑する。それはいったい何と何を比較しているのか。「東京で現在生活していること」という現実と、「山口でそのまま暮らしていたら」という反実仮想か。その仮想においては現実の東京生活はないことになっているのだから、比較相手の東京生活という現実はまだ起こっていないこととして仮想されなければならない。ないことにされなければならないものを現実と比較するというのはあまりよくわからない話になる。

グリフィンの話に戻ると、福祉はその生全体の期間をとることによってしか判断できないのだが(p.34)、そうすると個人「内」比較というときに何と何を比較しているのかがはっきりしなくなる。ある人の現実の全体の生と、知悉的欲求が充足された仮想的な全体の生を比較することになるのだろうが、その仮想的な生のほうは、現実のライフコースをとっていないものとして仮想されなければならない。遺伝的形質やライフヒストリーといった経路によって諸個人の欲求は形成されるのだとすると、生全体を比較する場合、そういった経路は(遺伝形質ぐらいしか)使えない。だとすると、比較対象として仮想される生のほうは、もはや仮想としてさえ「その人の」生とは言えなくなってしまう。それは個人「内」比較というよりは、「その人」のものではない理想的な生との比較ということになる。欲求形成の経路という情報を使えないとすると、「その人」にとって知悉という条件化で何が欲求されるべきものかを確定することができず、結局のところ福祉の計測が不可能になってしまうのではないだろうか。すべて満たされるべき客観的リストを提示するという方法をとらず、諸個人の自然的条件によって欲求されるべきものが確定されるという筋道は確かに個人の主観的な選択の余地を残したけれども、そのことによってかえって比較そのものが不可能になるという事態が起こっていないものか。